金糸の煙草

金糸の煙草　1

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19092371

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, ヨシ霊, 本番無し, 電気責め, モ腐サイコ小説100users入り

ヨシ霊です。師匠総受けです。暴力描写は含む予定です。今回は電気責め（本番なし）を含みます。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

金糸の煙草　1

諜報仲間の間で言い伝えられている、スパイ三原則というものがある。

酒に酔うな。機密を必ず漏らす。
趣味を作るな。心の隙になる。
恋人を作るな。必ず別れるから、心の傷になる。

分かっているのに、嗚呼、山ほどの先達が犯してきた過ちだと言うのに。

「よしふ〜♡」
俺はこのバーカウンターでテキーラの匂いだけで酔っ払った、俺のうなじを無遠慮に撫で回す胡散臭い男に、白に金の装飾のシガレット・ホルダーをプレゼントしようとしていた。

だってよ。

俺につられてタバコを吸うようになったら、コイツの綺麗な白い指が、ヤニで黄色く痣になってるのを見たら。
嫌だなって思ったから、俺はもう、終わりなんだ。

※※※※※

日本に存在する超能力者は、確認次第自衛隊の監視下に置かれる。とはいえ自衛隊も人手が潤沢な訳ではないので、監視といいながら「書類上データベースにブラックリストとして載っている」だけの超能力者の方が多い。ちょっと指から火が出せるとか、一瞬浮けるとか、その程度の能力の超能力者を一々自衛官を付けて監視する訳にはいかないからだ。もちろん例外はある。素行に問題のある「しょぼい」能力者は警察や役所と協力して監視することになる。ようは普通の前科者と同じ扱いだ。

問題は。
人間兵器として見過ごせないレベルの超能力者だ。
超能力者には２つの識別コードが与えられる。１つはその素行によってつけられる数字。０は至って問題なし、模範的な市民を表す。１は宗教的な理由なども含めて過激な思想と関係している者。２は過激思想を持ってる者。３は過激なデモなんかに参加した事がある者。４は前科がある者。芹沢なんかはここだな。最高ランクの５は反社会組織に属する者、もしくは精神的に極度に不安定で、暴走する可能性のある者。残念ながら影山茂夫はここに入る──いちいち抗議してくるなよ、話が進まないだろ。アンタが言ったんだぜ。

※

「これは逮捕とみなすけど。訴えてもいいやつ？」

夜道を歩いていた霊幻新隆を拘束して「話がある」と問答無用で連れて行こうとしたら、そんなことを言ったので、俺は仕方なく、何故、霊幻新隆を連れて行かなくてはいけないのか、の説明を近所の交番の一角を借りて、しなくてはいけなくなった。
これはあくまで任意同行である。警官でもなく令状もない俺が訴えられたら負ける。仕方がなかった。
超能力者の話は本当は国家機密なのだが、この男が自衛隊の研究機関に必要とされていることを説明するためには外せなかった。そもそもこいつ、世の中に超能力者が居るって知ってるし。超能力者の話をしてもそんなに問題は無いだろう。
「で、もう一つの識別コードが、人間兵器としてのレベルだ。Ｅは道具以下。ライターの方が便利、みたいな能力者だ。世の中のほとんどの超能力者はこれだ。Ｄはライター程度には使えるな、っていう能力持ちだ。ここからは威力と持続力が関係してくる。Ｃクラスはガスバーナークラスの能力者だ。犯罪に使えるから警戒対象に入ってくる。Ｂは火炎放射器レベルだな。ここまでくると政府からスカウトが入る。多くは自衛隊の秘匿部隊に入る。Ａは……瞬時に家を焼き尽くす火災レベルだ。災害を引き起こすような能力者のラ

ンクだ。お前の周りに居るのは、揃いも揃ってこのＡランクなんだよなぁ」
「それが何か問題なのか？」
「Ａランクなんて、世界的に見ても１００人居るかいないかなんだぞ？鈴木統一郎が言っていただろ。大した能力者は居なかった、って。それがお前の周りに、ざっと数えるだけでも５人も集まってる。Ａ-５影山茂夫、Ａ-５影山律、Ａ-４芹沢克也、Ａ-４花沢輝気、Ａ-４エクボ」
「肉の等級みたいだな」
「うるせえな。それで言ったら特上牛ばっかりなんだよ、お前が集めてるの」
ぱちくり、と霊幻は驚いた顔をしてまばたきをする。
「俺が、集めてる？」
「お前の相談所に出入りしてる元爪のメンバーを含めたら、その数は十を越える。明らかに異常な数だ。お前が『何らかの目的』で集めてるのか」
「はぁ！？」
「……それか、お前の『何か』が超能力者を惹き寄せてるか、だと、政府は考えた」
「……こじつけじゃねーか」
「でも危険物が集合しつつある事実がある以上、原因が不明でも放置はできない。それが危機管理ってものだ」
「……で？」
「善良な一市民であるはずのお前には、超能力者を集めていることに他意はないことと、超能力者を惹き寄せる『何か』が無い事を証明して欲しい。そのために静岡の陸上自衛隊開発実験団の部隊医学実験隊で『検査』を受けてもらう」
「静岡ぁ！？あんた社会人を突然静岡まで拉致するつもりだったわけ！？！？」
「……まあ、端的に言えば」
「ふっざけんなよ明日も営業あるんだぞ……で、具体的には何日ぐらいかかるの？その検査」
「……多分１〜２週か「ふっざんけんよお前！！行方不明届出され

るわ！！で？半強制なワケだな？ソレ」
「……そうだ。あくまで国防に関することだからな。アンタがどうしても抵抗するなら逮捕する罪を探し上げることもできる。完全にクリーンって訳じゃないだろ、アンタの商売。叩けば埃が出る」
ぐぬぬと胡散臭い詐欺師まがいの男は黙り込む。
「……分かった。自衛隊に協力しよう。でも、まず知り合いに連絡させてくれ。俺の知り合いが心配して動き出したら面倒なのはよく分かってるだろ」
「……いいだろう」
影山茂夫や芹沢克也が本気で霊幻新隆を探し始めたらあっという間に特定されて基地が襲われる。それは避けたい。
「あーもしもし、モブ？あ、いや急な除霊とかじゃなくて……この間健康診断あっただろ？そこで心臓の不整脈？みたいなの？が見つかってさ、念の為検査入院することになって。うん。２週間ほど。その間の相談所なんだけど、芹沢と相談して除霊の依頼だけ回しといてくんない？……そー言うなよ〜！頼むって、な？何かお礼すっからさ。じゃ、頼んだぜ」
「……休みにしねえのか？仕事」
ぴ、とガラケーの通話を切った男に思わず話しかける。
「……やる事あると余計なこと考えないだろうからな。次は芹沢だ」
ピリリリ、と呼び出し音が鳴る。
「あ、もしもし？いや緊急除霊の電話じゃないんだけどさ、この前の健康診断覚えてる？そう、問題なしって言われてたんだけどさ、念の為？俺だけ、心臓の再検査した方がいいって言われて。なんか不整脈が見つかった、とかで。うん、それで２週間ほど検査入院することになったんだけど」
電話口からめちゃくちゃ不満の声が聞こえてくる。霊幻も顔を顰めて携帯を耳から離していた。
「うんそう。悪いけど、２週間ほどモブと２人で相談所回しておいて欲しいんだよ。だーいじょうぶだって。できるできる！じゃ、任せたぜ！分からないことはメールしてくれたらいいから」
ぴ、と通話を切る。

「あとは、トメちゃんとテルくんぐらいか、相談所に顔出しそうなのは……こっちはメールでいいか」
カコカコと音をさせながらメールを打つ男をぼんやり眺めながら手を動かす。
長身の部類に入る霊幻新隆は、明るい髪色に白い肌の、グレースーツの細身の男だ。能力者でないことは内定済み。ただし書類には無能力者（？）とハテナが書かれている。これまでに確認したことはないが、超能力者を惹き寄せる能力者、という可能性がゼロでは無いからだ。
顔面は中の上というところ。口はこっちがウンザリするぐらい回る。頭の回転は早いような、そうでもないような……状況によってやる気が左右されるタイプのようだ。
「なんだよ」
性的な魅力で能力者を惹きつけている、という可能性は低そうだ。これまで諜報活動をしていく上で、まさしく傾城としか言えないような女や男には会ったことがある。こいつはアレらとは全然違う。
「……俺の報告書？」
「あーそうだよ」
『超能力者』である俺から見た印象だって大事な資料だ。俺は霊幻新隆がメールを打ってる間にちょこちょこっとメモを書いていた。ようは『俺は誑かされてませんよ』ってレポートだ。
「そっか、大変だな、お前」
どこか同情するような目で霊幻新隆がこちらを見てくる。
「俺を調べても何も出てこねぇのに、報告書とか調査書とかうんうん内容考えて書かなきゃいけないなんてな……」
煽りかとも思ったが。
なんだかそれが本当な気がして、今からどっと疲れた。
「連絡が終わったなら、携帯は一旦こっちで預かるぜ。ロックは掛からないようにしておいてくれ。丁度静岡に向かう部隊の座席に空きがあったから、それに合流するぞ」
途中まで諜報部隊の車で送って貰って、そこから陸上自衛隊のトラックの荷台に乗り込む。
眠っている２０人ほどの自衛官の手前に、俺と霊幻新隆は向かい合

わせで座り込んだ。
「……シートベルトとか」
「無ぇよそんなもん」
６輪トラックの荷台の乗り心地に絶句している霊幻新隆をよそに、車は静岡の富士駐屯地に走っていく。俺はさっさと眠りについたが、霊幻新隆は慣れない荷台に眠れなかったようだ。

「あててて……腰が……ウソだろなんで全員ケロっとしてんだよ」
同乗していた自衛官がちらっと霊幻新隆に目をやっては苦笑する。
「アンタとは鍛え方が違うんだよ。あとスーツで乗るもんじゃねぇな、トラックは」
恨めしそうに霊幻新隆に見られるが、こっちは知ったこっちゃねえ。
いつでもカツカツでやってる自衛隊の大変さ、ちょっとは思い知るがいい。
「貴方が霊幻新隆様ですね！お待ちしてました」
基地の入り口を俺のＩＤカードで通り抜けたら、白衣を着た５人の自衛官に霊幻新隆は取り囲まれる。やれやれ。これで俺の仕事は終わりだ。仮眠室でちょっと休憩……
「どこに行くんだい、コードネーム『ヨシフ』。この実験には超能力者の協力が必要なんだ。引き続き君に『レイゲン』の調査の協力をしてもらうよ」
……自衛隊に所属している超能力者で予定が無い者なんてのはほぼいない。俺の任務がこの１か月空白になってたのはこういうことか、クソッ。
つまり俺が、霊幻新隆に誑かされるかどうかチェックしたいのだ、コイツらは。
基本的に諜報部員は恋人を作らないのに人選ミスってないかコイツら？恋愛しないよう心掛けてるんだぞ、こちとら？
「こちらが契約書です。サインをお願いします」
「ん、ああ」
３枚ほどの契約書を受け取って。
霊幻新隆はそれを１行目から読み始めた。

……勘弁してくれよ、その間、俺も白衣軍団も待ちぼうけかよ……。
基地の前で立ち尽くす俺らを通りかかった自衛官が訝しげにじろじろと見ては去っていく。
「……なんかわりかし基本的人権に抵触しそうなこと書いてあんだけど。生命の保障ができないとか、自由の剥奪とか」
「自衛隊関係の書類なんてそんなものだよ。戦争に行くのに生命の保障ができるワケないでしょ？でもそうだな、今回はそこまでのことはしないから、その文言は訂正しておくね。後は了承してもらう」
白衣軍団の１番偉い三等陸佐が書類を訂正する。
「また強制かよ……」
「目隠しして拘束服で連れてこられなかっただけ感謝してくださいよ？アンタはＡランクの超能力者をあれだけ集めている。凶器準備集合罪でしょっ引いてもらって、身柄を自衛隊に引き渡してあとは一生実験体……ってルートもあったんですからね」
「いや俺の人権は！？」
「今が戦時下じゃなくて良かったですね」
「……」
不服そうに霊幻新隆が書類にサインする。
それにしてもコイツ。
肝の据わり方が半端ねーな！？
良くもまぁ半拉致されてきて、自衛官相手にここまで冷静に対処できるもんだぜ。あの怪しい霊感商売ってのはそんなに修羅場をくぐるモンなんかね。
「じゃあ、こちらに来てください」
霊幻新隆は白衣軍団に連れられて研究棟に連れて行かれる。
ウソ発見機と心電図をつけられて、尋問が始まった。
「はいかいいえで答えてください。あなたは日常生活に不満を感じていますか」
「いいえ」
ウソ発見機が微かに反応する。その数値をメモしていく白衣の男。心理学者の自衛官だ。

「あなたは超能力者を利用しようとしていますか」
「……はい」
驚いてタバコ落とすかと思った。ウソ発見機は動かない。
「でもそれは除霊という仕事においてで、テロとかそういうの
じゃ……」
「質問にははいかいいえだけで答えてください」
「……はい」
コイツ、超能力者を悪霊を吸える掃除機扱いしてんのか？信じらん
ねぇ……。
怖く、ねぇのかよ。
Ａクラスの超能力者なんて、核弾頭みてぇなもんだぞ。それを引き
連れてやることが廃墟のお掃除代行ってどんなギャグマンガだよ。
第一印象に反して、とんだ狂人なのか？
尋問はテロの意思の有無から、霊幻新隆のプライベートな部分まで
多岐に渡り、２時間経って終わったころには、みなぐったりしてい
た。
「危険思想の持ち主、では無さそうですね」
「証明できたのなら良かったよ……」
「それでもＡランク能力者が貴方の周りに集まっている限り、貴方
への監視は緩まることはありませんよ」
「別にいいよ」

その言葉が、妙に頭に残る。

後々気がつくことになるのだが、彼は「『俺を見張る分には』別に
いいよ」、と言ったのだ。それが彼がそのちっぽけな無能力の身体
で、魑魅魍魎みたいなＡクラスの能力者を守ろうとした言葉だった
から。

俺はこれから何度も、その「別にいいよ」を思い出すことになる。

が、その時の俺が考えてたことは、さっさと実験が終わってくれな
いかな、と言うことだった。

が。
次の実験がとんでもないものだった。
「霊幻新隆、あなたが超能力者を惹き寄せる特殊な物質……ようはフェロモンを出していないか、調べさせてもらいます」
「はあ」
霊幻新隆はスーツから人間ドックで着るような薄い検診衣に着替えさせられ、
拘束椅子の前で立ち尽くしていた。
「……俺、何されんの？」
コンクリート打ちっぱなしの狭い部屋の中は手足を拘束する革ベルトが付いた椅子だけが置かれていて、隣のコントロールルームから様子が見られるようになっている。
「ここは拷問部屋なんだけど、こういうの国際条約で作っちゃいけないことになってるから、あるのは秘密にしておいてくださいね。さて、拷問にも色々あるんだけど、その中の一つに快楽責めってのがあって」
白衣の自衛官は拷問部屋の壁からコードと電極を引っ張り出す。電極の先端を粘着質なテープに替えて、動作テストをしていた。
「電流で強制的に何十回と絶頂させるの。その様子を録画しておいて本人に見せたりして精神を削るんだけど、別に霊幻新隆さんは拷問目的じゃないから、そこまでしないから安心してください。ただ、絶頂によってフェロモンが出るかどうか分析するだけですので」
「それって」
呆然とする霊幻新隆の身体に白衣軍団は電極を付けていく。……性器や、直腸の中にまで。
「下世話な言い方をすれば、イき狂って貰うだけです。それによって発生する汗や唾液、精液を採取して分析させてもらいます」
「う、運動して出す汗とかじゃダメなの？サウナとか」
「フェロモンを出してる可能性が高いのは性的に興奮してる時ですから、これが早いんです。何日も拘束されたく無いでしょう？」
「……まあ、うん……」
電極だらけの裸で拘束椅子に座らされた霊幻新隆は、ビーカーやス

ポイトを構えた白衣組に挟まれて、椅子のベルトが締められていくのを呆然と見ている。
「自分で電極を外したり、暴れて転倒すると危ないので拘束はさせて貰いますね。１時間毎に休憩しますので、飲み物や食べ物の希望が有れば聞きます」
「……お茶と、チョコパイ」
「分かりました。可能な限り揃えます。では、始めますね」
白衣組の１番お偉いさんが隣のコントロールルームに頷いて合図を送る。
コントロールルームで操作盤に向かっていた兵器開発担当の白衣組が、ダイヤルをカチカチと回した。
「……っ」
性器の根元と先端に固定された電極からピリピリとした電流が流れ始めた霊幻新隆が息を詰める。
「尿道にカテーテルを途中まで入れますね。精度の高い精液採取のためです。御了承ください」
ゆるゆると電気刺激で強制的に膨張し始めていた生殖器に白衣が無慈悲にプラスチックのクダを挿す。
「順次、他の部位にも電流を流していきます。痛かったら言ってください」
コントロールルームの白衣がカチカチ、と次々とダイヤルを回していく。
「なんか電気風呂入ってる気分だな……はぁうっ！？」
明らかに色を含んだ声が上がってびっくりした。
「コントロール、今の部位は？」
『背中の下部です』
「はは、性感帯って案外自分じゃ知らなかったりするんですよ」
笑いながら医師の白衣組がメモを取る。
「そこっ……くすぐったっ……ちょっと、緩めて……んうううううっ！？」
また霊幻新隆がその色の淡い目を見開いて拘束具をガチャガチャ鳴らす。
「コントロール」

『首筋です』
「了解」
「やめろっ……これ、おかし……っあ！？」
ギクリと霊幻新隆が固まる。
「出る……イくっ、こんな、無理矢理……！」
「ああ、前立腺に電流が通りましたか。先ずは精液の採取からしますね。射精感はどうです？」
「も、出そう……見んなよ、クソッ」
「コントロール、もう少し生殖器と前立腺の電流上げて」
「！！」
霊幻新隆の顔に絶望の色が広がる。
「あ……あ……」
強制的に射精させられる成人男性が哀れで思わず目を逸らそうとしたら、
「君のコメントもいるんだからしっかり見てて」
と白衣に言われて苦々しく思いながら哀れな男を観察する。
「は、ぅっ……」
項垂れた男の口から垂れた唾液を白衣組の１人が器用にシャーレでキャッチする。
目を閉じてぶるりと身震いした霊幻新隆はびゅるるとカテーテルの中に精液を吐き出した。カテーテルの先端に繋がっているビニールパックに精液が溜まっていく。白衣組はある程度溜まったら新しいものに交換して、コントロールルームにある冷蔵庫に持って行った。
「出なくなるまで採取させて貰うから、よろしくお願いします」
「……は？」
霊幻新隆の目が見開かれる。拷問だな、もう、コレ。
「コントロール、前立腺の電流上げて」
「ちょっと待てって、今出したばっかりでそんな……無理無理無理無理！！」
「大丈夫だよ」
医師の──拷問の研究をしている白衣が、真っ黒な瞳で霊幻新隆を覗き込む。

「人間の快感は電気信号が管理してるんだ。ポイントに電気を流せば強制的に射精できるから」
「何一つ安心できる情報がねぇ〜！！」
「ああ、そうか、そろそろ汗の採取もしたいな。コントロール、痛みが出ない程度に各性感帯の電流上げて」
霊幻新隆が抗議しようとした声は甲高い嬌声に変わる。
「ぃやっ！いやだぁっ！！あぁっ、こんなっ、見るなぁ……っ！」
白い肌が興奮でピンク色に変わっていく。過ぎた快感がぶわりと汗腺を開いて、ビッシリと汗をかき始めたので、白衣組が小さなビーカーで汗を集めていく。
「……っ、うあっ……」
霊幻新隆がまた射精した。
「ぁうっ……んんっ、あ、あ、あ……」
ぐったりとした霊幻新隆は、快感を少しでも逃すために声を上げるだけになってしまった。……一般人にコレはちょっと可哀想な気がする……。
「じゃあ、ヨシフ、霊幻新隆さんからフェロモンが出てないか嗅いでみてくれる？」
「「は？」」
医師の白衣に言われて霊幻と同時に声が出た。
「はい、心電図付けて」
ペタペタと服の下に電極を貼られる。
「首筋と脇の下、陰毛付近を嗅いで、感想を頼みます」
何が悲しくて汗だくの男の体臭チェックをしなくちゃならないんだ……と思うが、コレも仕事だ。
俺は拘束椅子に近づいて霊幻新隆のアゴを掴んで顔を上げさせる。
快感でトロけた顔の中で、目が。
はっきりと理性の光を宿していて、心臓が跳ねた。既に陥落しているものだと思っていたから。
タフな男は嫌いじゃない。なかなかどうして、霊幻新隆は面白い男みたいだな。さすが政府にマークされるだけはある、ということだろうか。
俺は霊幻新隆の首筋に鼻を近づけて、何度も匂いをかぐ。

「……っ」
霊幻新隆は恥ずかしさに顔を赤くする。
「……ボディーソープの匂いと、発情してる人間特有の甘苦いにおいがした」
「よし。次」
俺は霊幻新隆の脇に鼻を近づける。
「汗臭い」
「よし。次」
俺は床に膝をついて、霊幻新隆の股間に顔を近付ける。
彼は恥ずかしさに顔を背けた。
「ボディーソープと……まあ、股間独特の臭気があるな」
霊幻新隆が唇を噛んだ。
「よし。フェロモンらしきものを感じたのは首筋あたりだね？」
「まあ、そうかも」
「首筋の汗は別に集めよう。さっきの分は液クロにかけておいて。うん、条件は性フェロモンと同じで」
白衣組の１人が退室して冷蔵庫からビーカーを持って出て行く。
「じゃあ」
にーっこり、と医師の白衣組は霊幻新隆に笑いかける。
「続きをしようか」
ひゅ、と彼は息を止めた。

※

「あ゛っ！！あああ゛っ！！もうやらぁっ！！」
俺は火のついてないタバコを口に咥えたまま、もうかれこれ６時間ほど責め苦にあう霊幻新隆を眺めている。
なんつーか。
俺はちらっと霊幻新隆の快感を操作している白衣組の股間を見る。
そこは見事なテントを張っていた。
快感に身悶え涙を流す霊幻新隆は、壮絶な色気を放っていた。いや誰しも快感責めにあえばああなるんだけどさ。
ある程度訓練で勃起を制御できるようになっている俺でも、ちょっ

とキツくなってきた。真顔で分析を続けられる医師の白衣組が鉄の精神に思えてくる。いやあいつら変態なだけな気もする。でなきゃ好きこのんで拷問の研究なんてしないだろうし。
「今日はこれぐらいにしておきましょうか」
コントロールルームのダイヤルが０の目盛りに合わせていかれて、霊幻新隆がほーっと息をつく。
俺もホッとした。一般人が拷問まがいのことをされているのを見るのは気分の良いものじゃない。
「はー、疲れた……晩飯なに？」
拘束を解かれて、立ち上がってすぐにそんなことを言う霊幻新隆に驚く。
「お前、拷問に耐える訓練でも受けたことあんのか？」
「いや、ないけど」
思わず聞くと平然と返してくる。
「キツくなかったか、今日の検査」
「いやー、検査だと思えば、別に。恥ずかしかったし疲れたし腹は減ったけど」
……そうか。
こいつ、『恐怖しなかった』からあんまり疲れなかったんだな？
リラックスして電流を受け入れてたから、余計な負荷が掛からなかったのだろう。
……恐怖中枢ぶっ壊れてんじゃねぇのか、コイツ。
「……晩飯は基地の部隊食が出る。量は多いが味は保証する」
「うお、ちょっと楽しみだな。俺、自衛隊のご飯食べるの初めてだわ」
気が抜ける男だ。
ピリリリ、と霊幻新隆から預かっていた携帯から着信音が鳴った。
「はい、医師の鈴木です」
俺が出る。もし霊幻新隆に出させて、身内だけでわかる合言葉で情報を漏らされては困るからだ。
『霊幻はどうした』
低い声だ。身体に憑依したエクボだな。
「麻酔の必要な検査を受けられて、まだ眠っておられます。ご家族

や同僚への説明は私から、と言づてをいただいておりますので」
『ほーん』
エクボは一瞬黙って。

『誰だお前』

冷や汗が垂れた。
『俺様、今日暇だったから見舞いがてら確認に行ったんだがな、調味市のどこの病院にも霊幻は居なかった。おいお前、霊幻をどこにやった』
「入院してる方のプライバシーでお教えできないこともありますので……調味市立病院に明日改めて来ていただければ」
だらだらと汗が流れる。まずい。超能力者たちに動かれると災害が起こりかねない。
『ふーん、調味市立病院ね……あっちょっ、おま、何しっ』
がたがたっ、と電話の向こうで電話を取り合う音がする。
『……』
「もしもし？」
『……………………ヨシフさんですね？』
マズった、と思った。芹沢だ。
『霊幻さんは今、軍事施設に捕らえられているんですね？』
咄嗟に返せない。
「……いえ、病院に……」
喉がカラカラだ。声が上手く出せない。
怒らせるなよ俺、相手はＡ－４ランクの化け物だ。
「……その……」
「あー、ちょっと代われ」
そう言われて霊幻新隆に電話を奪われた。
「あーもしもし？芹沢？どーしたんだよまだ初日だろ……え？俺が行方不明になってる？何言ってるんだよこうやって喋ってるじゃねぇか。今何処にいるか？」
チラッと霊幻が俺を見る。俺は手で大きく×を作った。
「ひみつ♡いーだろ俺もいい大人なんだからさぁ、言いにくいこと

の一つや二つあるっての……え？さっきの医者に代わるの？はいはい、分かったって」
俺の手にガラケーが返ってくる。
『とりあえず、霊幻さんの元気な声が聞けて良かったです。これは我々に取って良かったという意味ではありません。ヨシフさん、あなたたちにとって（・・・・・・・・・・）、良かった、と言っているんです。意味は分かりますよね？』
「……ああ」
『ヨシフさん……俺のせいで霊幻さんに迷惑をかけているのだとしたら、俺は割と、我慢できないかもしれない。話があるなら俺にでしょう？霊幻さんは関係無いはずだ。早く俺たちの元に霊幻さんを返してください。そうでないと……ええと、なんて言ったらいいのかな……そう、

国家の安全は、保証できないかもしれないです』

分かった、と掠れ声で言って俺は電話を切った。

続